

跳び箱運動に発展させるための幼稚園教育における運動遊びプログラムの開発

清水茂幸*, 清水将*, 佐藤菜美*, 千葉紅子**, 渡邊奈穂子**, 高橋文子**,

本宮和奈**, 吉田美奈子**, 佐々木由美**, 川村真紀**

*岩手大学教育学部, **岩手大学教育学部附属幼稚園

(令和2年3月4日受理)

1. はじめに

小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省,2018)低学年の跳び箱を使った運動遊びでは「踏み越し跳び」や「支持で跳び乗り・跳び下り」などが中学年以降の跳び箱運動に繋がる領域として位置づけられている。しかし実際に小学一年生の授業を観察すると、両足で踏み切りができない、踏み切りのタイミングが分からず跳び箱にぶつかってしまうというような、身体操作の未熟な児童が一定数みられる。

このような現状は、幼児期に障害物に向かって跳ぶような経験が少ないことが要因として考えられる。幼児期運動指針(文部科学省, 2012)でも、幼児期における身体活動の問題として、多様な動きを含む遊びの経験が少なくなっていることを問題として挙げている。これらのことから幼児期において、「跳ぶ」という基本的動作を含んだ遊びができる環境を構成することは必要不可欠といえよう。

しかし、杉原ら(2014)は「幼児期に運動のバリエーションがない運動を繰り返す行うことは、運動発達に貢献せず、ふさわしくない」と述べられている。そしてまた、「全てを子どもたちに決めさせるのが必要なのではなく、子どもたちの自己決定と保育者の指導性(決定)のバランスが重要である」とも明記している。したがって、幼稚園で自由遊びと集団遊びの時間に跳び箱の遊びを行い、自由に跳び箱を使って遊べる場と、一斉に跳び箱を使用して遊べる場を作り、バランスよく跳び箱遊びの経験ができる環境を設定することは運動発達に大いに貢献するものと考えられる。

先行研究を調べると、跳び箱を使用した遊び環境

設定の研究は、加納ら(2014)による小学校1年生を対象とした授業の中での実践例は確認できたが、幼稚園児を対象とした跳び箱の遊び場については、体育学研究の中では過去10年間見受けられなかった。

よって、本研究は、自由遊びと一斉遊びの中に跳び箱を物的環境として設定することの有効性を検証し、幼児期における跳び箱の遊び場について新たな知見を得ることを目的とし、実践を行った。

2. 方法

1. 実践期日・時間

令和元年12月2日(月)～12月5日(金)

2. 実践場所

岩手大学教育学部附属幼稚園 ホール

3. 対象園児

自由遊び 年長児(男21名, 女23名) 計44名

集団遊び 年長児(男11名, 女11名) 計22名

4. 使用物品

・SONY HDR-CX675×2台

・カラー跳び箱×3台

・カラーマット×5枚

・ケンステップ

5. 実践内容

【自由遊び(2時間程度)】

ホールの一隅に跳び箱を1～2台、マットを2枚設置し、遊びに関わる幼児がどのような遊びや動きをしているのかをビデオ観察した。遊びの内容は指定せず、園児の主体性に任せ環境構成をした。

【一斉遊び(15分程度)】

1日目に高鬼のルールを説明し、3日間高鬼遊びの

様子を撮影した。跳び箱の横にスプリングマットを設置し、跳ぶ動作が出現しやすい環境を構成した。

—高鬼遊び ルール—

- ・跳び箱は「鬼にタッチされない逃げ場所」
- ・スポーツジムやステージの上は鬼に捕まらない場として利用している
- ・積み木などの危険な場所は禁止
- ・全員がタッチされたら終了

6. 評価規準・方法

【自由遊び】

① 動きが多様化しているか

「36の基本動作」(中村,2006)を基準項目(表1参照)とし、実践時に撮影した跳び箱遊びの様子をみて、基本的な動きの種類をカウントした。動作のカウントは、幼児の自由遊びにおける基本動作を直接観察した真砂(2018)の先行研究に倣い、以下の基本ルールを設定した。

- ・カウントは、動作の停止、動作の後に他の動作がみられた時点を動作の完了・区切りと判断する。
- ・動作を失敗したり、途中で中止したりした場合、カウントしない。
- ・今回は跳び箱を使って出ない「うく」「およぐ」「こぐ」「とる」「わたす」「ほる」「ふる」「なげる」「うつ」「ける」と日常的に多く行われる「あるく」を除く25項目でカウントする

2日以上連続して遊んだ園児を対象とし、遊びを開始した日と終えた日で、出現した基本的動作の種類数をt検定(両側検定)し比較した。

② 動きが洗練化しているか

助走して跳び箱に乗る動作を、基本運動開始期の段階表(勝二ら,2012)を参考に、両足踏み切り=A、片足踏み切り=B、よじのぼり=Cに分類した。また、Aを3点、Bを2点、Cを1点とし、数量化して処理した。

2日以上連続して遊んだ園児を対象とし、遊びを開始した日と終えた日でそれぞれ最も多い動作をそ

動作の系統	基本的動作
平衡系動作	・たつ ・おきる ・まわる ・くむ ・わたる ・ぶらさがる ・さかだちする ・のる ・うく
移動系動作	・あるく ・はしる ・はねる・すべる ・とぶ ・のぼる ・はう・くぐる ・およぐ
操作系動作	・もつ・ささえる ・はこぶ ・おす ・おさえる ・こぐ ・つかむ ・あてる ・とる ・わたす・つむ ・ほる・ふる ・なげる ・うつ ・ける ・ひく ・たおす

表1 36の基本動作 中村和彦(2006)

の日の得点として、サイン検定、直接確率計算で比較した。

【一斉遊び 跳び箱高鬼】

上記と同様に、片足乗りと両足乗りを分けてカウントし、跳び箱にその2種類の乗り方が3日間全体でどれくらい出現するかを分析し、高鬼をした園児がどれくらい跳び箱に乗る経験ができたかを分析した。

3. 結果

1. 自由遊び

①動きの多様化

跳び箱遊びを始めた日と終えた日で、1人あたりの基本的動作出現数の平均をt検定で比較したところ、平均値の差に有意差がみられた(図1)。

②動きの洗練化

「動きが洗練しているか」を園児23名で比較したところ、両足跳びに近づいた園児は12名と増加し、遠のいた園児は1名であった。直接確率計算による偶然確率は $p=0.0034$ (両側検定)であり、有意水準1%で有意であった。4日間で動きが洗練していくことに効果があったといえる(表2)。

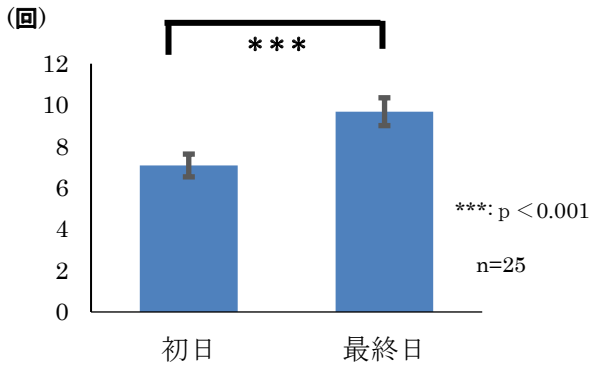


図1 1人あたりの基本的動作出現数の推移

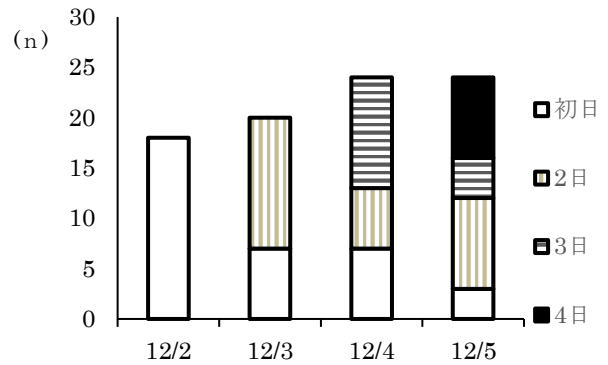


図3 遊んだ園児の総数と遊んだ日数の比

表2 動きが洗練化されたかどうか

↓	↑	変化なし
1	12	13

2. 一斉遊び 跳び箱高鬼

跳び箱高鬼は3日間集団遊びとして行った。

3日間全体(図2)の動きをみると、跳び箱に乗っていない園児は2名であり、片足でも両足でも跳び箱に跳び乗った人数は16名と多くの園児が小学校の運動遊びに見られるような動きで跳び箱と関わったということが示されている。

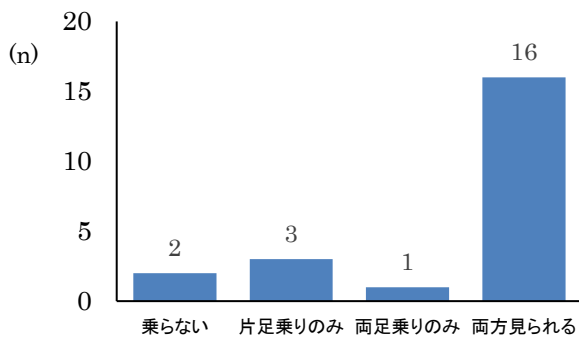


図2 跳び箱に「乗る・跳び乗る」の動きをした人数(3日間全体)

また、遊んだ園児の総数と遊んだ日数の比は図3に示すとおりである。

4. 考察

自由遊びについて、動きの多様化の観点からみると、自由遊びでみられた動きは、36の基本動作において様々な動きが観察され、遊びを通して基本的動作が増加したといえよう。これらの要因として、2点考えられる。第一に、跳び箱の遊び場が跳ぶだけの場ではなく、テーマパークのようにたくさんの場が連結し、発展したことが関係していると推察される。園児たちは跳び箱の遊び場を、跳び箱単体ではなく他の遊具と合体させて遊びを変化させ楽しんでいた。場が変化したことで、跳び箱の上から他の遊具に「わたる」という動作、ケンステップを落とし穴と見立て跳び箱のすぐ前に置くことで「(遠くに)とびおる」動作などが、遊びの最終日には多くみられた。遊び場が変容していくことで、動きのバリエーションも増加していったということが伺える。第二に、器械運動として跳ぶという概念のない幼児期に跳び箱を遊び場として設定したことが、自由な動きを引き出していったのではないかと推察される。日を追うごとに、2~3人組で「手をつないだまま助走する」「抱きつきながら下りる」などの動きも出現していった。これらの動作は、学習指導要領の器械運動の領域ではみられない。教師が技を指示したりせず自由に跳び箱の遊び場で遊ぶことで、多様な動きが出現したと推察される。

動きの洗練化の観点からみると、サイン検定で比較した際、有意水準1%で有意差がみられた。これら

の要因として、周囲の園児の動作が大きく影響したと考えられる。4日間の跳び箱遊びをビデオ分析すると、自分より1つ前の園児が行った動きを、真似して挑戦する姿が多くみられた。実際、初めて両足踏み切りで開脚跳びが成功した園児2名は、いずれも体操教室に通う園児の開脚跳び動作の直後に行われたものだった。周囲の園児の動きをみて、「この動きは楽しそう」と挑戦し、跳ぶことの楽しさに触れて繰り返し行うことで、さらに難易度の高い動きも身に着けていったものと推察される。

この自由遊びでは、対象園児44名中、35名が自由遊びの中で跳び箱遊びを経験した。うち2日以上遊びを楽しんだ園児は25名であり、70%以上の園児が跳び箱遊びに楽しさを感じ、何度も遊び場で跳び箱と関わったということが示されている。

集団遊び（跳び箱高鬼）についてみると、跳び箱高鬼は、3日間の中で22名中20名の園児が跳び箱に跳び乗ったり、乗りあがったりする経験をした。また、走った勢いそのまま両足でジャンプして乗るといった動きが多く出現した。これらの要因として、以下の二点が挙げられよう。

第一に、鬼ごっことして遊びを展開したことで「はやく高い場所に逃げよう」という意識が芽生えたためだと考えられる。障害物に対し踏み切りをするという感覚ではなく、鬼からの避難場所という好意的に捉えられる場として跳び箱を使用したことが、使用回数の多さに繋がったのではないかと推察されよう。

第二に、スプリングマットを横に置いたことで跳び箱に乗る回数を増加できたものと考えられる。高鬼の様子をビデオで観察すると、スプリングマットの上も鬼に捕まえない避難場所として使用する園児が多かった。その隣に跳び箱があることで、スプリングマットで跳ねて

いた勢いそのまま、両足で跳び箱に跳び乗るといった動きも引き出せたのではないかと推察できる。また、スプリングマットは自由遊びの時間にも踏み切り板として活用していたこと、年長組の教室内に置いておき、日常的に跳ねるような遊びをしていたことが、今回の動きを引き出したのではないかと推察される。

4日間の遊び全体を通して、自由遊びでは跳び箱を置いておくだけで36の動作のうち園児全体で23もの基本的動作が出現し、その出現回数も増加することが示された。そして跳び箱を越えるときには、両足跳びで跳ぶ動作に近づき小学校跳び箱運動でみられるような動きが自然と増加していった。また、跳び箱高鬼を一斉遊びに取り入れることで、自由遊びでは跳び箱に関わらなかった園児も楽しみながら跳び箱に触れあう環境を構成できた。

これらの様子から、幼稚園において跳び箱を物的環境として取り入れることは、「動きの多様化」と「動きの洗練化」、「跳び箱と関わる経験を生む」ことに効果がある事が示唆された。

5. まとめ

本研究は、幼稚園の遊びの中に跳び箱を環境として取り入れることでどのような影響を及ぼすかについて、新たな知見を得ることを目的とした。今回は、自由遊びと一斉遊びの二つの方向から跳び箱遊びを取り入れた。自由遊びでは「動きの多様化」、「動きの洗練化」、一斉遊びでは「跳び箱と関わる経験を生み出すことが示唆された。

これら3点の分析をしたことで、以下のことが明らかになった。

1. 幼児期に跳び箱を取り入れることは、幼稚園の自由遊びでは自然発生しないような倒立姿勢や跳び越す動きを引き出した。基本的動作の出

現する種類の数が、日を追うごとに増加していった。

2. 跳び箱を越えるときの動きは日を追うごとに発達段階でより難易度の高いところに位置付けられている動きに変容していった。

3. 跳び箱高鬼という遊びを取り入れることで、運動が得意ではない幼児を含め多数の子が跳び箱に乗る経験を生み出した。その際、両足で跳び乗るなど小学校での跳び箱運動に必要な動きも多く出現した。

以上のことから、跳び箱を幼児期の遊びの環境として取り入れることは、幼児期に「動きの多様化」と「動きの洗練化」に効果があるだけでなく、幼児にとって魅力的な遊び場となるということが示唆された。

また、今回の結果から以下のように課題点も明確になった。

*1日目から4日目まで連続して遊ぶ幼児もみられたが、何度か跳び箱に興味をもって近寄りながらもずっと跳び箱を利用して遊びはしない園児も数名みられた。遊びが連続し、園児同士で跳び箱遊びがより発展していくように工夫した環境設定をすることが必要である。

*跳び箱高鬼では、跳び箱を2～3カ所にしか設置しなかったため、頻繁に跳び箱に乗る幼児がいると、消極的な幼児が乗れないことも多くみられた。よって、跳び箱の避難場所を増やし、さらに「跳び箱に乗る」という選択肢を増やす援助が必要だった。

6. 謝辞

この研究を行うに当たりご協力いただいた附属幼稚園の園児及び教職員の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

—参考・引用文献—

- 文部科学省(2018)幼稚園教育要領概説, 145-166
- 文部科学省(2012)幼児期運動指針ガイドブック, 18-20, 49-51.
- 文部科学省(2018)小学校学習指導要領解説 体育編, 27-28. 44-50
- 中村和彦 他(2011)観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達, 発育発達研究, 51. 1-18
- 杉原隆 他(2011)幼児の運動能力と基礎的運動パターンとの関係, 体育の科学, 61. 455-461
- 中村和彦(2011)運動神経が良くなる本, マキノ出版
- 真砂雄一(2018)小池学園 研究紀要, No. 16, 幼児における基本的な動きの種類と出現頻度について, 100-104
- 板倉遵夫(1985)跳び箱. 学校体育研究同志会編 小学校体育の授業3・4年, 97-113, 民衆社.
- 加納岳拓 他(2014)跳び箱を使った運動遊びにおける環境のデザインに関する研究, 三重大学教育学部附属教育実践センター紀要, 第34号, 75-81.
- 新戸信之(2017)幼児を対象とした跳び箱指導方法の検討および跳び越しに寄与する下位運動技能の検証, 秋草学園短期大学紀要, 第34号, 149-164
- 杉原隆 他(2014)幼児期における運動発達と運動遊びの指導, 49



跳び箱1日目



跳び箱3日目



跳び箱2日目



跳び箱4日目

跳び箱運動・・・1日目 → 4日目
多様な動きに変容した

重心の移動を伴う 9 つの動作				
姿勢の変化や安定性を伴う 9 つの動作				
人や物を操作する 18 の動作				

中村ら(2006) 幼児期に身につけたい36の基本動作